

Title	経済学部所蔵「マルクス『資本論』第1巻初版写真版」について：Yさんへの手紙から
Author(s)	松田, 博
Citation	静脩 (2002), 39(2): 10-13
Issue Date	2002-08
URL	http://hdl.handle.net/2433/37673
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

経済学部所蔵『マルクス』『資本論』第1巻初版写真版』について Yさんへの手紙から

文学部図書室閲覧掛長 松 田 博

1995年11月

Yさんへ

先日は資料閲覧に格段のご配慮をたまり誠にありがとうございました。また、経済学古典のいくつかを拝見することができましたこと、こころよりお礼申し上げます。

ところで、1974年購入の『資本論第1巻初版』あるいは1988年購入のボルクハイム・ジーギスムント・ルートヴィヒ宛マルクス自筆献辞入り『資本論第1巻初版』を目にし、興奮のあまり榊田文庫蔵の『資本論』について原本を確認する機会を失ってしまいました。

お話では、1974（昭和49）年3月7日付け登録の『資本論』、これは1983年に東北大学附属図書館で開催された「マルクス没後100年記念展」に他の資料とともに出展されたということでした。展示資料としては例えば、マルクス自身による訂正のある『哲学の貧困』、あるいはパスカルへのマルクス自筆献辞のある『資本論フランス語版』、この「フランス語版」は1925年に欧州から帰国した堀経夫が河上肇に渡欧記念として寄贈したものであり、かつその後河上肇が榊田民蔵に寄贈したものであるとのことでしたが、これらが一堂に展示されたということでした。さらに、1988（昭和63）年2月25日付け登録の『資本論』、これについてもご説明をいただきました。このボルクハイム宛献辞の入った『資本論』に関し興味を覚えたので、帰洛後少し調べたことを以下に補足いたします。

マルクスは『資本論』を1867年に公刊した際、何冊かを出版社オットー・マイスナーを通じ寄贈しています。そして、それら以外にも自らの献辞を入れ献呈をしております。このマルクス自身の献辞のある『資本論』は、現在ではきわめ

て稀少なものですが、どうしたことが日本には小樽商科大学にリーナー・シェーラー宛のものが、法政大学にはルートヴィヒ・クーゲルマン宛のものが、関西大学にはアウグスト・フィリップス宛のものが、従って東北大学所蔵のものを含めると4部もあり、たいへんな驚きを覚えます。

このようなことを語っていると話はつきません。そこで、本題にかえりまして、たいへん不躰ではありますが以下の点についてご教示ねがえれば幸いと存じます。

まず、ひとつめに『榊田文庫目録』の記述からすると「榊田文庫」に『資本論』がもう1部あることになり、したがって東北大学での所蔵は3部ということになりますが、文字通り3部の所蔵でよいのでしょうか。ふたつめにこの『資本論』は欠落箇所がたいへん多いのですが、このあたりの事情についてわかるところをお教え下さい。また、欠落箇所の補充についてはどのようなになっているのでしょうか。さらに榊田文庫への所蔵に至る経過等についても教えていただければ幸いです。

お忙しい最中、とりとめのないことをお聞きするようで心苦しいのですが、よろしくお願いいたします。

1995年12月2日

Yさんへ

昨日、11月29日付けのお手紙を拝受いたしました。お忙しい中ご調査いただき、榊田文庫蔵『資本論』についての十分なるご回答をいただき感謝申し上げます。

榊田文庫蔵本は、紙焼き写真版であること、欠頁がSS.63-186, 192-496, 499-510, 513-526, 528-

550, 746-763と多いこと、また欠頁部分については補充していないこと、『櫛田文庫目録』No.476の記述は「写真版」の注記がない以外は記述どおりであること、櫛田文庫への所蔵経過については不明であること、お手紙は以上のような内容であったかと思います。

ところで、この「写真版」の元本は、ご承知と思いますが現在では法政大学大原社会問題研究所の所蔵になる『資本論』で、クーゲルマン宛のマルクス自筆献辞入り献呈本です。クーゲルマンその人については、ルートヴィッヒ・クーゲルマンといい、医師であり国際労働者協会の活動家でもありました。この元本はまた『資本論第1巻初版』としては、原装訂を残した大変稀観なものの1冊でもあります。

この元本である『資本論』について少し触れておきますと、宇佐美誠次郎（1）にもありますように、1921（大正10）年に櫛田民蔵が大原社会問題研究所のために欧州で買い求めたもので、それはハースバハ文庫

の1点として購入されたものです。このもとともクーゲルマンが所蔵していた『資本論』が、法政大学大原社会問題研究所の所蔵に至った経過は次のようであります。1902年1月にクーゲルマンが死去しますが、その後クーゲルマン蔵書の一部が売りに出され、古書店等何らかの経路でハースバハの手に入ったと思われます。そしてそのハースバハ文庫は、1920年4月にハースバハが死去し、その1年後古書店シュトライトンを通して櫛田が手に入れ、大原社会問題研究所の所蔵となり、その後大阪にあった大原

社会問題研究所の閉鎖・改組の後、現在の法政大学大原社会問題研究所の所蔵に至ったというわけです。

「写真版」の櫛田文庫への所蔵経緯についてまだ憶測の域を出ませんが、櫛田は経済学関係の文献の少ない当時であって、特に『資本論』研究の必要性や普及を考える中で写真版の作成を行ったのではないのでしょうか。京都大学経済学部にも同様の写真版があり、1925（大正14）年11月13日受入、登録番号 314656となっております。親交の深かった河上肇が当時京都帝大にいたことを合わせ考えると、櫛田が贈ったものなのか、河上が無心したものか、はたまた全く別ルートで入ったものなのか興味がわきます。機会があれば入手に至る事情を調べてみたいとも思っております。



この京大所蔵のものは欠頁がSS.63-186, 192-496, 499-510, 513-526, 528-550, 553-555, 561-566, 578-588, 600-607, 635-741, 746-764 となっており、前半は東北大学のものと同じですが、後半かなり欠頁が見受けられます。

これも研究上の関心によるものなのか経費的な面からなのか、ネガの散逸によるのか少し調べてみる必要があるようです。

原典による経済学研究が緒についた1920年代初頭、というよりは「経済学古典原典の流入と日本の経済学確立（?!）」というテーマからすると、少し触手をのばしたい衝動にかられます。

1995年12月19日

Yさんへ

先の手紙で、櫛田文庫中の「『資本論』写真

版」と同様のものが京都大学経済学部にも所蔵されていると記しました。早速、京大所蔵のものの受入年月をたよりに、「大内兵衛、大島清編『河上肇より櫛田民蔵への手紙』法政大学出版局（1974年7月）」に目を通しておりましてところ、「大正14年6月5日付書簡」に以下のような内容で大原社会問題研究所蔵『資本論』の借用を願い出ているものに出くわしました。

“前後いたしました、資本論首章の各版参照版発行の件、研究所の御同意を得ました様子、私にとっては第一に勉強になるのであり、もしそれが多少アトに残る意義ある仕事になり、かねて研究所に対し多年の因縁に酬いる萬一ともなれば、本懐の至りです。早速仕事に着手しやうと思えますから、先づ第一版を拝借したいと思ひます。それが済むなら順次に次の版をとりかへとりかへて拝借したく存じます。研究所の外に持ち出すことをお許し下さる様子、私にとっては時間の節約上大変に助かります。郵便で送って頂ければ結構ですが、其紛失を気遣はれるなら、そのうち私が拝借に出掛けることにいたします。”

また、その「書簡」に関する注記をたよりに、「カアル・マルクス原著、大原社会問題研究所編『原文対訳資本論初版首章及附録』弘文堂、同人社（1928年8月）」の序文に目を通しましたところ、底本について以下のように触れておりました。

“リプリントの基本として使用されたものは、マルクスが嘗て友人クーゲルマン（第二版の跋文参照）に署名して贈った稀有の珍本で、大原社会問題研究所の所蔵に属するものである。その扉および巻頭におけるマルクスの自著は左の写真版に示すが如くである。因みにいふ、京都帝国大学に蔵するものの扉は、茲に示せるものと相違する。”

1920年代初頭の経済学確立期に、『資本論』の翻訳という仕事を通してその普及をはかるといふ河上、櫛田、小林、長谷部らの奮闘振りと

ともに、河上と櫛田の親交がうかがえるような気がいたしました。

「写真版」はこの折に作成されたのではないかという思いを強くした次第です。

以上、取り急ぎ前回の内容の修正方、お礼まで。

2002年×月×日

Yさんへ

ご無沙汰をいたしておりますが、お元気で活躍のことと存じます。

ところで、以前「『資本論』写真版」についておたずねした件に関し、もっと早くに手紙を書かせていただくべきところそのままになっておりました。今回唐突ながらあらためて筆をとらせていただきました。

かつて杉原四郎先生はそれまでの論攷をまとめられ、「『思想家の書誌』日外アソシエーツ（1990年5月）」を公刊されました。「思想家」の中心はもちろん経済学者ではありますが、社会学者等も含めこれらの方々の「追悼集」について解題されたものです。該博な先生のお仕事は新しい視点をいつも感じるのですが、このお仕事もまた追悼集を通して故人の思想形成や人間関係を再構築するという新たな提起と展開をなされております。この書で取り上げられた追悼集を参考に、わたし自身も追悼集を集めてきました。

その中の1点に「宮川實編『回想の長谷部文雄』八潮書店（1982年7月）」があります。長谷部文雄は、『資本論』の研究・普及のために一生を捧げた方で、最後は龍谷大学の教壇に立ち後進の育成に当たられた方です。追悼集の中に「『資本論』初版以後とその各国における普及状況」と題する一篇が収録されています。1967年6月2日の立命館大学経済学会総会での講演記録ではありますが、その中にこれまで推測の域を出なかった「写真版」の作成経緯について触れている箇所がありました。

全く迂闊なことで、これに目を通してさえばお手をわずらわせずに済んだのにと、いまでは反省しております。いずれにしましても、該当の部分を少し長くなりますが、引用して紹介しておきます。

“さて私は、さっき御紹介がありましたように、京都大学の河上肇先生の門下生であります。昭和時代ならば、今年は四十二年だから、昭和何年は何年前だということがわかりますが、私の学生時代は大正なんです。大正九年から十二年まで京都大学にいました。そして大正十三年に同志社に勤めまして、昭和八年までおりました。

その昭和二年頃ですね、今から四十年前、私はまだ学校を出てまもない時代であります。河上先生からこれをやれといわれた仕事が『資本論』初版の第一章なんです。・・・

ところが河上先生は昭和二年から『資本論』の翻訳を始められた。これは宮川實君 名前はご存じでしょう。私の親友で高校時代の同窓なんです。この宮川實君は東大の英法科を卒業した法学士なんです。私が京都で河上先生の弟子であった関係から、どんなに『資本論』が面白い、経済学をやれというわけで、宮川實君を京都へひっぱってきました。そして河上先生に紹介し、弟子になったわけです。・・・その宮川實君が河上先生の『資本論』の下訳をしまして、河上肇、宮川實共訳ということで岩波文庫から『資本論』の翻訳が出版され始めたその当時のことでありますから、河上先生はいま言った大原の『資本論』の仕事を自分でやる暇がない。先生は非常に仕事が緻密で丁寧でありますから、あれもこれもいっしょに、ちゃらんぼらんにやってしまうということができない人です。お前がやれということになり、私がやることになったわけです。

『資本論』の初版本の、これは大原に一冊しかない、ほかにも何冊かあることはわかっていただけれども非常に貴重な書物ですが、これを大

原で写真にとりまして、今ならばコピーが何かで簡単なんです。その当時に普通の、あの写真ですね、ガラスの乾板にとりまして、何枚か複写して、河上先生、大原関係の人々、何人かに分けてた、もらったのか借りたのか知りませんが、その一つを私が借りて原稿がわりにして、これは大事なものですからなるべく汚さないようにして、京都で印刷し、翻訳文をつけました。左側の頁はドイツ語で印刷し、右側の頁には、ちょうど左側にドイツ語で出ている部分の日本語をつけたのです。”

これ以上多くを語る必要はないかと思えます。京都大学経済学部でも静かにその利用をまっていた「写真版」の、その由来が確認できたことに一安堵しております。ただあらためての感想になりますが、1920年代に経済学確立に取り組んだ人たち、とりわけ河上肇や櫛田民蔵等の真摯な姿に感動を覚えたことを表明しておきます。

最後に『資本論』について補足しておきますと、現在日本での所蔵は36機関45部、個人所蔵は3氏3部があり、このほかにも個人や機関の所蔵が何部かあると思われますが、最小に見積もっても48部があることになります。また、そのうちマルクスの献辞が入ったものは4部で、これは大村泉（2）にみられるように、マルクスが献呈したとされる初版が総計32部であったこと、そのうち現存が確認できるものが11部であるということからすると、極めて驚嘆に値すべき数といえるでしょう。日本のマルクス研究の深さと広さを感じさせる事象でもあると言えますでしょう。

長くなりました。御身ご自愛ください。

- 1：宇佐美誠次郎「大原研究所所蔵の『資本論』初版本とその周辺」（『学問の五〇年』所収 1985年9月 新日本出版社）
- 2：大村 泉「『資本論』第1部初版本の伝承」（『新MEGAと《資本論》の成立』所収 1998年4月 八朔社）

（まつだ ひろし）